

木谷蓬吟 文樂史

文
樂
史

序 詞

「文樂」といふものについて、正確な認識を求めようとする智識人を對象に、敢てこの書を公けにする。

「文樂史」は、文樂座史でもあればまた淨瑠璃史でもあり、一面文樂藝術物語とも云へる。融通自在に考へていたゞきたい。

これでも「史」と云はれるか、どうか、と叱られても一言ない、所謂歴史書の形態に囚はれないで描いたからである。

だいたいの淨瑠璃史料の文獻は歌舞伎などに比べて甚だ貧弱で、それが近代に至るほどいよいよ乏しい。この難澁な資料の蒐集と検討には、日頃餘り達者でもない私に取つては、非常な重荷であつたと見え、これが爲め數年間筆を執れないほどの重患に悩まされたものである。しかし、こんな小著でも何かの役に立つたとすれば、それは著者の手柄でもなく全く資料のせみである。「人」よりも「物」が物云ふ本書でもある。

本篇を三分し前篇には文樂座前史として、元祖義太夫の竹本座創立の苦心から一流大成まで。中篇には文樂座初代文樂軒の大阪登場から長門太夫の天保復興を叙べ、後篇としては、明治時代文樂藝術の情勢を、人物本位に側面から觀察し、特に文樂人の血みどろになつての難行苦行、藝道練成の體當り精神など相當力描したつもりである。

實のところ本書は、十餘年前現在の四つ橋文樂座新築記念として松竹依囀、同社日比繁治郎氏の助力に俟つて執筆した「文樂今昔譚」（非賣頒布本）の大改訂版である。殆ど全篇に亘つて修訂、「明治の文樂」その他を増補し、松竹會長白井松次郎氏の諒解を得、全國書房田中秀吉氏の好意あるお勧めによつて上梓することとなつた次第である。

ただ舊著に添へた文樂興行年表、殊に苦心編纂した文樂座重要事項摘録の全部を、都合上割愛したのは遺憾であるが、それは「文樂今昔譚」か、最近刊行の「松竹關西演劇誌」（いづれも大阪松竹會社發行、非賣品）に就いて知られたい。尙ほ本書「文樂史」は、昨春刊行の拙著「淨瑠璃研究書」の姉妹篇とも云ふべきで、多少の重複や精疎記述の加減もあるが、併せ參酌をたまはるなら、彼此相償ふことも出來、著者の本懐これに過ぎぬ。

昭和十八年新春

著者

目次

前篇 文樂以前……………一

元祖義太夫生る……………三

百姓の子で天狗鼻の天才

三都の淨瑠璃王……………一〇

淨雲、播磨、加賀

竹本座に革命の旗揚……………二〇

敵は師匠、悲痛の競争

苦節苦戰の十九年……………二八

缺損つゞきの興行難

「曾根崎心中」の成功……………三九

新しい現代劇の試み

新座主竹田との提携……………四六

舞台で發病、義太夫の終焉

後繼者政太夫の偉業……………五八

二十四歳で櫓下となる非凡兒

大近松の死……………六七

大阪大火に絡む因縁話

出雲、文三郎の大變革……………七二

忠臣藏初興行の騒動

竹本座遂に崩壊……………八五

文三郎脱退、近江の驕奢

豊竹座退轉とその後……………九一

始祖越前少掾の末路

中篇 文樂登場……………一〇三

正井文樂軒大阪へ来る……………一〇五

文樂座の始り、代々の座主一覽

説教讚語座の來襲……………一一二

文樂座との大激戦

天保の改革令と藝人彈壓……………一一九

役者は何匹、太夫は何人

清水町濱興行時代の文樂……………一二〇

附、子供首振り芝居の流行

文樂隨一の大柱石……………一四二

幕末を飾る巨匠長門太夫（三代目）

後篇 明治の文樂……………一七一

明治初期の淨瑠璃界……………一七三

異色名匠銘々傳

一 畸人長尾太夫（初代）……………一八一

天王寺村の名村長

二 學匠長門太夫（四代目）……………二一〇

淨瑠璃大系圖の著者

三 左官綱太夫（六代目）……………二二二

全身刺青の美聲家

四	馬方彌太夫（四代目）	二二三
	端場専門の豪音家	
五	酒脱春太夫（五代目）	二二四
	湯屋の三助もした	
六	風流染太夫（六代目）	二二六
	自叙傳三十冊を綴る	
七	山僧三光齋	二二七
	高野から轉向した	
八	滑稽山城掾	二二〇
	附、チャリ淨瑠璃遊談	
九	精悍古鞆太夫（初代）	二二五
	劇場で惨殺された	
十	盲人住太夫（四代目）	二二七
	記憶のよい美音家	

文樂の新作改作淨瑠璃熱……………	二二九
變態史劇（活歴）の影響……………	
血の出るやうな難行苦行記……………	二四〇
淨瑠璃道修驗者の體験……………	
三味線彈きの名手……………	二五八
團平、廣助、その他かずかず……………	
手すりの二名家……………	二六八
玉造と紋十郎……………	
語り手の大表的五名匠……………	二七五
攝津、彌、津、大隅、越路……………	
文樂座初めて松竹に移る……………	二八五
その前後の事情と今後……………	
（附記） 文樂と對立した各座の興亡……………	二九四
夏草やつはものどもの夢の跡……………	